

ヨコハマは千載一遇のチャンスを活かしたか？ アルジェイロ一家との出会いを通じて

佐藤 真起

横浜キヤンプ村世話人

唯 一、横浜国際総合競技場側に開かれたサポーター交流型のスペース「港北サッカー交流広場」に、横浜キヤンプ村※①が参加していた時だったと思う。海外サポーターに英語の情報コーナーを作ったり、ピースポール・プロジェクト※②も抱え、またミニサッカー場ではゲームの組み立てにキヤンプ村メンバーのC.O.J.B※③が一役買うなど、目の廻るような忙しさの中で、その電話はかかってきた。

「安く泊れるところありますか?」。名前はタニエル・アルジェイロ。エクアドルから妹と2人で来ていて22才と19才だと言う。横浜キヤンプ村(以下キヤンプ村)のホームステイのチラシを、港北区の海外交流ラウンジで偶然見つけ、電話してくれたいらしい。

「若い男女の2人旅で兄妹? エクアドルから? ほんとに?」。失礼な話だが、咄嗟にそう思いながら「今何処にいるの?」と聞く。横浜の駅にいて、ホテルは高すぎる、とにかく安く泊れるところを探しているという。

決 決勝戦会場の側に、パブリックビューもある安く泊れる国際平和キヤンプ村を」という官民協働のキヤンプ村構想は、横浜では実現しなかった。共催国韓国では10都市のうち8都市でキヤンプ村が開設された。ホームステイの組織化も日本よりは遥かに進んでいる。僕たちが2年がかりで提言した構想に、横浜市からの応えは、ホテル業界への配慮とフリーガンに怯える地元への配慮と、そのような土地もお金も手

もありませんというものであった。それでも横浜へ世界中から人々はやって来る。僕らは急遽、自前のホームステイ・ネットワークを横浜で構築しながら、海外サポーターの受け入れを始めていたところだった。海外サポーターの宿泊にどうぞ我家をと申し出てくれた横浜市民は十家族以上になっていた。中には「外国人の老夫婦が山谷のドヤ街に安いからといって泊まっているTV報道を観た。僅かな年金を使ってサッカーと日本を楽しみに来てくれたのに、日本人として恥ずかしい。是非協力したい。」と日本側の無策に怒りながら電話をかけてきてくれた先輩の方もいた。

キ ヤンプ村の仮事務所は、新横浜の駅からも競技場からも近いオルタナティブ生活館という生協の文化施設の一階に置かれていた。このビルの地下にあるスペース・オルタという多目的小ホールの事務所が機能を担っていた。とにかく、ここに来るようになって電話を切ったが、しばらくしてもカッブルは現れない。30分以上してからまた電話が鳴る。「場所がわからないのでもた駅に戻った」と言う。



「ホームステイをしたエクアドルのアルジェイロ一家。真ん中の日本人男性が、ホストファミリーのお一人」

駅まで駆けつけると、エクアドルの大きな国旗を掲げた小柄な若者が、キオスクの前にもっと緊張した面持ちで立っていた。

「横浜キヤンプ村の佐藤です。」と握手を求めると、こちらが驚く程礼儀正しい挨拶が返ってきた。今回のワールドカップを機会に、是非、アジアを訪ねてみたいと家族で来日したと言う。最初に妹のガビイ、それから母のメリー…。

「えつ、お母さん?」と聞くと「3人でも大丈夫だろうか?」と心配げに聞いてくる。どうやら、日本のウサギ小屋はエクアドルでも知られているらしい。3人だと普通の家庭での受け入れは難しからうという長男タニエルの戦術で、電話では先ず2人だけを告げたいらしい。こちらは逆に、お母さんの存在で家族ということが証明され一安心したのだった。

そ の後一週間程遅れてお父さんと下の妹も合流し、タニエルたちは、結局5人のアルジェイロ家御一行となった。滞在中、彼らは何度キヤンプ村に遊びに来たことだろう。スペース・オルタの大スクリーンで試合を放映する時、またParty for Kickと銘打って開いたトークあり、コンサートありの、多人種入り乱れる大パーティーにも。



決勝戦直前に開いたParty for Kick—サンバと沖縄の島歌で世界中の人が盛り上がる

また東京に住む日本の先住民アイヌの長老を招き日本列島の生活文化の多様さを海外に紹介しようとした企画にも、アイヌ式の折りの場に神妙に参加し楽しんでいくてくれた。決勝戦では、沖縄やブラジル音楽の全員総立ちのライブの後に、ビッグスクリーンの前にブラジル人50人程、ドイツ人50人程、その他の国籍20人程、日本人80人程の人がびっしり埋まったの大観戦となったが、もちろんフェイスペインティングをした彼らも混じつての大パーティーとなった。

彼 らから見れば日本の物価は数倍から、ものによっては数十

倍以上だろう。それでも、今回のW杯の旅は「私たち家族の一生の宝物となる」と言い切つて決断を下したのはお母さんのメリーだったらしい。子供たちの成長と、自分達の年齢を考え、家族で世界を旅する最後の機会と、はるばる海を渡つてやってきたのだった。

アメリカ留学中で英語に最も堪能な長男タニエルを筆頭に、スペイン語も英語もままならぬ異国日本を仲良く助け合つて旅ゆく彼らの姿は、受け入れたホストファミリー側にも大きな刺激を残していったようだ。お世話をしたというよりは、彼らの家族の絆の強さに驚かされ、逆に自分の家族関係を見直させられたと感慨を覚えてくれた方もあった。

アルジェイロ一家は、今回のW杯で自分達を迎えてくれたホストファミリーをヨコハマ・ファミリーと呼

んでいる。そして自分達のことをエックアドル・ファミリーと呼ぶ。キャンプ村のことも、ヨコハマ・ファミリーと呼んでいて、それは社交辞令で無いのがよく分かる。僕らも、彼らとのお別れパーティーの時には、本当に胸に迫るものがあつたのだ。

その後、ヨコハマ・ファミリーのある一家は友人を伴い、昨年末にエックアドルのアルジェイロ家を訪れた。大変な歓迎ぶりを立派な小冊子にして、キャンプ村に謝辞とともに送つてきてくれた。また、今年末にも別のホストファミリーが、アルジェイロ一家の待つエックアドルに行くという。交流は未だ、いやこの先も続いてゆくのだ。

日 韓W杯を、横浜市民が世界に直接出合う千載一遇のチャンスととらえ、横浜キャンプ村は2年

間近くもの間活動してきた。アルジェイロ一家との交流は、キャンプ村全体の動きからすればほんの一部だけれど、とても心に残るものであり、こんな交流がいまも続いているということ具体的に紹介させていたのだ。本来なら、このような交流が千人単位のスケールで、この横浜から一斉に始まってゆくことを僕たちは夢見てきた。韓国よりはお金もインフラも潤沢なはずの日本で、そうならなかったのは何故だろうか？もう2度と無いかも知れないビッグチャンスも、潜在的なヨコハマ・ファミリーたちは果たして活かし切れたのだろうか？

キ ヤンプ村のメンバーには多種多様な市民が参加している。3回に及んだ韓国訪問交流ツアーのコーディネーターであり、ジャーナ

リストでもある康熙奉（カン・ヒボン）さんは、今回の共催W杯を自著の中で振り返り「国威発揚の韓国」対「経済効果の日本」と総括した。また、サポーターメンバーのスポー

ツ・ジャーナリストで大会中韓国取材をしていた大島裕史さんは、先日、（財）横浜市国際交流協会と横浜キャンプ村の共催で開いた講座「W杯を振り返る」では、祭りとしていい加減さも含めた勢いでやりきった韓国と、仕事として肅々とシステムでこなそうとした日本の対比に、大変面白く言及していた。どちらの言い方も、今の日本の国民の力の在り様を言い得ている。翻つて、大阪万博や東京オリンピックの頃のことを考え併せると、後10、15年も経てば、韓国にも日本のようにマーケットやシステムのリアリティの方が、祭りにおける人々の体温

を上回る時代がやって来るのだという薄ら寒い予感もないではない。

と 得なかつた「国際平和キャンプ村構想」が次のドイツ大会では実現することを、僕らは性懲りも無くまた夢見ている。そして、ささやかではあつたけれど、横浜での僕らキャンプ村の活動とプランを、ドイツにいるはるばるの僕らのような市民に伝え、W杯というビッグチャンスを下イツ・ファミリー(?)には充分活かしてほしいとも伝えたい。何と言つても、この冷え冷えとした御時世を貫く温もりとして、W杯にはワンポール、ワンルールを合言葉に、マーケットやシステムなどには還元され得ない様々な出会いがあることは確かなのだから。

※①横浜キャンプ村

99年12月頃より活動を開始。翌年5月より始まった毎週水曜日夜の定例ミーティングを軸に、6月には競技会場議室を使つてのカウンタダウンイベントや勉強会、講座の主催、市民イベントへの参加など、様々な活動を以後継続。また、2001年10月には、当時の横浜市長宛に、共催国韓国の取り組みの独自調査も背景にした「官民パートナーシップで作るW杯国際平和キャンプ村」構想をまとめ提言した。一貫して、競技場の外で繰り広げられるサポーター同士の交流を、もう一つのW杯として着目し、そのムーブメントに横浜市民がどのように係れるのかを模索、実行してきたグループ。

※②「ピース・ボール」プロジェクト

若者たちが企画し紛争地も含む世界をクルーズで訪ねるピース・ボートで、日本で集めた不用のサッカーボールを、ボールの買えない子供たちに届け一緒にサッカーをした後プレゼントする「ピース・ボール」。既に途上国を中心に2千個以上のボールを届け、W杯期間中、横浜キャンプ村も一緒にプロジェクトとして取り組み、海外からのサポーターに子供達へのメッセージをボールに書いてもらい、その様子をビデオに取めた。サッカー文化へ託すサポーターたちの想いを作品にしようとしている。メッセージが書かれた150個ほどのボールは既に世界中の子供達の手に渡っている。

※③C.O.J.B

ブラジル・プロリーグと連係して、プロを目指す日本の若者の育成を手がけている団体。常時数人のブラジル・プロリーグ選手を日本から送り出し、彼らのサポートも手がける。都筑区に事務所を置き、ブラジルサッカー文化のエッセンスを横浜に還元しながら、少年サッカーを初めとした日本のサッカー文化の底上げに努めている。W杯期間中はキャンプ村と一緒に、サッカー交流広場でポツポツと遊びに来る海外サポーターや、少年たちとゲームの組み立ての中心を担った。